

流れを通しておこるポテンシャルエネルギーとのやり取りが無視出来ないという批判がある。これに対して Charney (1971) は準地衡風近似下では

$$q = \zeta + \frac{f}{\rho} \left(-\frac{\bar{\rho}}{N^2} \phi_z \right)_z, \quad (\text{但し } \zeta \text{ は準地衡風うず度, } \phi \text{ は}$$

geopotential, N は Brunt-Väisälä 周期) の自乗が近似的に保存するので、2次元乱流と同様に k^{-3} のスペクトルが期待出来る事を示している。

(時岡達志)

山の気象シンポジウム アブストラクト

日 時 6月17日 13時より

場 所 気象庁第一会議室

1. 大気の異常屈折について

岸 富士雄(北穂小屋) 大井正一(気象研)

昨年10月北穂小屋から望んだ富士山のシルエットが普段と違って見えるのに気付いた。これは多くの登山者によっても認められ、望遠レンズにて撮影したので、幾枚かの写真をお目につけ、併せて当日の気象状況と比べて原因を考えたい。

2. 東北地方の山岳における万年雪について

土 屋 巖(気象研)

1971年8月~11月の3回月山の万年雪を調査し、1530mの高度に年層のある小規模な snow field を発見したが、さらに過去にさかのぼっての秋の航空写真によって、月山・鳥海山・飯豊山の越年性の残雪調査を進めたところ、種々の興味ある事実が見いだされた。

たとえば、飯豊山には北アルプスの3大雪渓にもまさるほどの、「石ころび沢雪渓」があるが、この沢の近くのある部分では、高度800m以下に越年する残雪があり、大量の積雪となだれのたまったものが、深い谷の日かげに残る例と見られる。また、鳥海山では噴出時期の新しい熔岩上にごく小規模なカール内の万年雪がいくつかあり、雪蝕または氷蝕作用の大きい時代が、いわゆる最後の氷期以後に存在したことを示唆している。

3. 昭和46年1月28日一の倉沢での遭難時の気象

上 田 文 夫(気象庁)

昭和46年1月28日、一の倉沢でグループ・ド・ポエムの会員2名が、遭難し、ほぼ半年後に遺体で見つかった。その時の気象について調べたので、山岳遭難における気象の一例として報告し、今後の山岳遭難の減少に役立てたい。

4. 春富士大遭難時の気象

大 井 正 一(気象研)

3月20日春富士で凍雨と雪崩により、二十数名の死者が出た。当時の気象状況を種々の角度から再検討して見たので報告する。

5. 春富士大遭難当時の現地状況

北 原 由 昭(気象庁)

東京都岳連気象委員会では、当日富士山及び各地の登山をしていたパーティーについてアンケートを行ない、当時の気象変化の報告を受けた。ここに幾人かの当事者及び報告によって、山における気象変化の認識をあらたにしたい。

6. 衣服の濡れによる熱のそう失——春山の遭難の一つとして

神 山 恵 三(気象研)

春山の遭難の一つとして、0度前後の気温状態のときにおけるミゾレなどによる濡れのために引きおこされるものがある。

衣服の熱貫流が、濡れによっておおいに高まり、熱のそう失が盛んになり、体温調節の限界をこえてしまう。

同時に、風による熱のそう失も一そう大きなものになる。

こうした熱のそう失の機構を明らかにして、そのために防備について考えた。

7. 山の音

根 本 順 吉(気象庁)

数年前、在世中の山本三郎氏から山の音について数多くの興味ある事例をあげた手紙をいただいた。これらの例を中心に、これを文献・資料によって補い、山の音といわれる現象を分類・整理してみた。